

小麦における肥効調節型肥料を用いた 追肥全量 1 回施肥法

1 技術の要約

速効性窒素肥料と肥効調節型肥料を配合して越冬後に追肥することにより、春の農繁期で多忙な時期の2回目の追肥を省略しても、従来の2回の追肥と同等の収量、品質が得られる省力的な施肥法を4年間の研究で開発しました。

2 技術の内容

(1) 速効性窒素肥料とリニア型 15 日タイプの肥効調節型肥料（被覆尿素肥料）を窒素量で 1 : 1 に配合し、越冬後に生育量を考慮して通常の 1 回目の追肥時期に全量を追肥します。（※リニア型 15 日タイプとは、窒素成分がほぼ一定速度で溶出する肥料で、25℃条件で 80%が溶出するのに 15 日を要する温度依存性の肥料です。）

なお、越冬後の生育量が過剰の場合には生育量の抑制、倒伏の防止のため追肥を遅らせます。著しく過剰な場合にはこの追肥法は不向きなので従来の追肥に準じて行います。

(2) 主に硬質小麦においてタンパク質含有率を高めるには、越冬後の生育量が適正量確保されている場合には追肥時期を 2 週間程度遅らせることが有効です。なお、追肥を遅らせても所定のタンパク質含有率の確保が難しい地域、圃場では従来の追肥に準じて行います。

(3) この施肥技術に基づいて製造された肥料は「麦用追肥一発肥料（30-0-0、内リニア性 16%）」が JA 全農長野から市販されています。

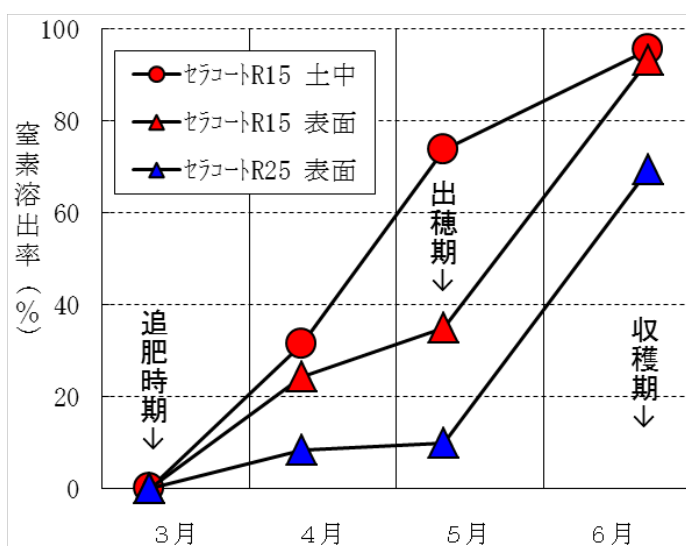


図1 肥効調節型肥料からの窒素溶出(平成 23 年)

注) 追肥は土壌表面施肥のため土中施肥より溶出が遅れます。15日タイプが適当でした。



写真1 「麦用追肥一発肥料」